

百年を経て託されし「望郷のバラード」 爪弾く心の叫び

後世に名曲・名演と云われるようになる作品には、実に不思議なほどの糸に繋がれたドラマ仕立てのようなものがある。

小品が十九曲収まる天満敦子さんのアルバム最後の一曲「望郷のバラード」が、まさにそうだった。

まず、その由来が劇的で、その歴史ドラマに思わず引き込まれることになった。

話は天満さんが三十代後半ルーマニアに文化使節として訪問した一九九二年にさかのぼる。

その際の演奏が同国の文化大臣にオイストラフの再来と絶賛され、それが縁で音楽通の駐在日本大使や外交官等の手を経て、ほぼ一世前のルーマニア出身、薄幸の作曲家ポルムベスクの遺作「望郷のバラード」の楽譜が天満さんに託されることになった。

そして、日本で天満さんの手による初演が爆発的な評判を呼び、アルバムはクラシック界では異例の大ヒットとなった。

話はこれに留まらない。憂いを帯びた美しい旋律とともに、曲に秘められたエピソードも話題を呼んで、小説も生まれた。

「百年の預言」。朝日新聞に連載され、天満さんがモデルの主人公で登場するまでに至った。

さらに、その話題とは全く別に、終戦六十年の企画NHKのドキュメンタリー番組。シベリア捕虜収容所が舞台。

虜囚の身のルーマニア人が手づくりのバイオリンで祖国を偲んでルーマニアの或る名曲を切々と弾く日々を送っていた。そこに同じ虜囚の日本の軍医。ふたりは絶望の中でも励ましあって故国の土を踏む夢を捨てなかった。

その後ふたりの身はお互いの祖国に戻るようになったが、結局日本の軍医は、ルーマニアの墓地で虜囚の友の墓



奇遇の「名曲・名演奏」

標にすがって号泣することになったという。要所にルーマニアの例の名曲が流れた。ストーリーは実話である。

たまたま僕ら夫婦は、この番組を観ていたが、当時は要所に挿入されるテーマ音楽の何たるかを知らない。

ところが後年、ルーマニアの名曲とは「望郷のバラード」であったことを知る。

話二題に何の脈絡もないが、「望郷のバラード」がそこに登場する人々の人生を支えていた。

いわば、愛国心を覚醒させる民族曲であった。一方、天満敦子さん。

天衣無縫と云われる個性と磨かれた才能が、糸で結ばれたようなこの作品と出会えば、自ずとそこから放たれる音楽の世界は特別なものとなった。

天満さんが使用するバイオリンはストラディヴァリウス晩年の名作、弓は伝説の巨匠イザイの遺品を使用している。

序章、祖国を思う溜息なのか、うめくような低音で始まる。愛国運動による囚われの身の無念を咆哮するのか、同士や家族や恋人に寄せる思いなのか、ピアノ伴奏も寄り添って、哀愁に満ちた主題を繰り返す。

やがて同胞に届かんとばかりに激しく、また切々と主題を織り交ぜながら、作曲家の魂を乗せて、ルーマニアの脊梁・カルパチア山脈、ドナウの流れ、夕陽に輝く丘陵地帯をさまようがごとく謳いあげる。

愛国運動で獄中の身となって死の間際で纏め上げたポルムベスクの渴望が、一世を経て同郷のバイオリンニストの手に渡り、紆余曲折の末、天満さんが引き継いで、世に放たれたのだった。

作品は他の弾き手には許されない、天満さんにとって天与のもの、今や天満さんの代名詞となっている。

.....

まさに、これぞ奇縁としか云えないようなドラマを観た思いであった。